

【11】『増補陸奥津軽深浦沿革誌』

刊1冊（4714）

〔書名よみ〕ぞうほむつつがるふかうらえんかくし

〔著編者〕海浦義観 〔写刊年次〕大正七年（一九一八）

〔外題〕増補^{陸奥津軽}深浦沿革誌

〔内題〕増補^{陸奥津軽}深浦沿革誌

〔その他題〕〈尾〉増補深浦沿革誌

〔残欠状況〕全 〔保存状況〕良好 〔装訂〕袋綴 〔紙数〕三三三丁

〔本文用字〕漢字・平仮名 〔一面行数〕一行 〔界線〕ナシ

〔匡郭〕縦一五・二糎×横九・六糎 〔表紙〕淡黄・無地 〔法量〕縦

一八・五糎×横一二・九糎 〔料紙〕洋紙 〔書入〕ナシ 〔表紙書

入〕ナシ 〔印記〕「曉坊蔵書」（朱・単郭・陽刻・円） 〔備考〕ナシ

〔奥書〕

明治卅一年十二月廿五日 発行

大正七年七月二十日 増補再版発行 （非売品）

発行人兼著作者 陸奥国西津軽郡深浦村大字深浦四百十五番戸

青森県平民

海浦義観

印刷人 陸奥国西津軽郡鰺ヶ沢町大字本町

長内忠三郎

発行所 陸奥国西津軽郡深浦村大字深浦

深浦保勝会

〔解題〕

一八九八（明治三一）年に刊行された『陸奥津軽深浦地方沿革誌』の増補版である。新たに加筆された内容は、たとえば深浦郵便局の開局（一八七四（明治七）年）、深浦尋常小学校の開校（一八七六（明治九）年）、郡制の実施による西津軽郡の成立（一八七八（明治一一）年）など、深浦の近代化を物語る事項や、高野山金剛峰寺貫主大教正獅岳快猛が巡回し、円覚寺で三日間布教結縁灌頂を執行したこと（一八八三（明治一六）年）、義観自身が行った日清・日露戦争の戦没者供養や、毛髪刺繍観世音三十三体影像曼荼羅三福の作製など、円覚寺の出来事などである。

また、発行元になっている深浦保勝会をリードした広田牧人はこれよりも前に没しており、義観はあとがきで次のように悼んでいる。

故広田牧人は夙に地方事蹟の冥晦を嘆して。有志者を募り。深浦保勝会を起し専ら遺蹟を保存せんと欲す。明治戊戌の冬。余に深浦沿革誌編纂を囑せり。余浅学不才加るに仏典研究のため。寸暇なきも敢て辞する能はず。其大要を摘録して。史蹟を紹介するなり。然るに本誌は廢藩置県を以て筆を止めければ。維新の実況を。後來幼童に記憶せしむる能はざることを甚た憾とす。頃日有志の諸士謀り。更に増補訂正して再版せんことを乞ふ。聊か其責を塞くのみ

大正七年四月 海浦義観誌す

（尾崎 名津子）

增補 陸奥 津輕 深浦沿革誌

增補 陸奥 津輕 深浦沿革誌

海浦 義 觀 著 述

我青森縣陸奥國西津輕郡深浦の地は、上古都加留蝦夷の地なり。初は安東浦と云ひ。次に海浦と稱し。後に深浦と呼へり。會津四家合考に曰。上世神武天皇の時。安日長髓彦といふ者あり。兄弟二人勇悍にして智略あり。常に弓箭を佩して諸州を横行す。乃大和膽駒山に抵り。神美真手命を奉して主とす。以て中州を領すること茲に年あり。神武天皇日向より東征するに及び。長髓彦之に抗して。拒戦すれば遂に誅して。其兄安日を都加留安東浦に放つ。之によりてこゝに居り。子孫世々望族たり。後世安東氏の號あるは。これに本つ

六

大正七年四月

海浦 義 觀 誌 す

故友廣田牧人は夙に地方事蹟の冥晦を嘆して。有志者を募り。深浦保勝會を起し専ら遺蹟を保存せんと欲す。明治戊戌の冬。余に深浦沿革誌編纂を囑せり。余淺學不才加るに佛典研究のため。寸暇なきも敢て辞する能はず。其大要を摘録して。史蹟を紹介するなり。然るに本誌は廢藩置縣を以て筆を止めければ。維新の實況を。後米幼童に記隠せしむる能はざることを甚た憾とす。頃日有志の諸士相謀り。更に増補訂正して再版せんことを乞ふ。聊か其責を塞くのみ

五六

明治卅一年十二月廿五日發行
大正七年七月二十日増補再版發行

(非賣品)

陸奥國西津輕郡深浦村大字深浦四百十五番戶

青森縣 平民

發行人兼 著作者 海浦 義 觀

印刷人 陸奥國西津輕郡陸奥町大字本町 長 内 忠 三 郎

發行所 陸奥國西津輕郡深浦村大字深浦 深浦 保勝 會

不 許 復 製